

SDA の霊性低下と世俗化、そして中央集権化の問題(エレン・ホワイト)

霊性低下と世俗化 (P.24) 当時、教会が直面していた大きな問題の一つは、指導者たちの霊性低下と世俗化の問題でした。E・ホワイトは、1890年11月3日とその後の幻の中で、バトルクリークの人々が大事なことについて神ではなく人の知恵に頼っている、神に関する大事な事柄が経験不足の人々の手にある、指導者たちは自分たちの意見に賛同する人たちだけを集めている、など極めて大事な事柄が示された。1892年、E・ホワイトは「自己中心、貪り、誇り、争い、心の頑なさ、肉欲、悪しき慣習」が教会の中に見られる(→代表例：レビュー出版社)、と書き、また清められていない牧師たちが完全な改革を経験しない限り、牧師の働きを去るべきである、とまで訴えた。

中央集権化 (P. 25、77) もう一つの問題は、世界総会を中心とした中央集権化と統合化の問題であった。世界総会の総理と少数の人々は、教会のあらゆる面で支配権を行使し、小さなことまで彼らの承認を求めた。また、レビュー出版社、バトルクリーク衛生病院、バトルクリーク大学の指導者たちは、同種の機関を一つの理事会のもとにまとめて統合化しようとした。そうすることで、働きの一致を保つことが出来る、経済的である、効率的になると主張した。

E・ホワイトは、1890年代を通して教会のこのような過ちを「少数の人々に権力を集中したり、一つの機関を他の機関のもとに置くことは神の計画ではない」「大きな権力が少数の手に委ねられるとき、サタンは断固たる決心をして判断を誤らせ、誤った原則をほのめかし、誤った方針を持ち込みます」と指摘、改革を訴えた。また、中央集権のもとでは、人々は権威のある者に導きと支持を求め、最も大事な神に依存するという経験を失ってしまう、と警告した。教会は明らかに改革が必要でしたが、指導者たちは改革の一步を踏み出せなかった。

参考：エレン・ホワイト ―その生涯とメッセージ― 山形正男 著